

## 対立と協調——中国「専業主婦」の母親規範と役割行動の葛藤に関する考察

鄭楊（中国哈爾濱師範大学）

## 1. 問題の所在と目的

中国女性の就業率は世界トップクラスに位置している。そのために、近年中国都市部を中心として、専業主婦が増加しているにも関わらず、それらにフォーカスする研究があまり見られない。実際には、1980年代スタートした改革開放以後、「婦女回家」（女性は社会から家庭に戻る）について激しく議論されてきた。しかし、その論争の焦点は主婦化が社会にとって、女性にとって進歩か後退かという点である。また、欧米の主婦化の三つのプロセスを基点として、経済成長の著しい中国での主婦化の必然性と特殊性を検討する学者もいる。一方、筆者の聞き取りに際し、「私は専業主婦ではなく、専業主婦だ」と繰り返して強調されていく中で、これまで、社会構造の変遷、市場経済の影響などというマクロ的な視点による先行研究の限界に気付かされた。

そこで、本報告は、増加しつつある中国の主婦をより明確に理解するためには、ミクロレベルの日常生活において、彼女たちが親密な関係と妥協、協力する中で、どのように自己調整をして新しい役割に適応し、自己認識を形成しているのかを明らかにする。とくに、本報告は、社会転換期を生きる中国の「専業主婦」は、計画経済時代の「男女平等」「脱性別化」「主婦は寄生虫」といった性別役割規範から、市場経済の「男は仕事、女は家庭」「良妻賢母」「母親役割は天職である」という性別役割意識の変化に対して、どのように全く異なる性別規範に葛藤しながら適応しているのかを解明する。

## 2. 方法

ハルビン市、大連市、貴陽市など12名の専業主婦を対象に、「良き母」の基準、子ども中心の生き方、社会進出と女性の価値などについて、半構造化インタビューを行った。「良き母」に対する意識や実際の役割行動を詳細に把握するため、規範葛藤の激しい専業主婦対象とした座談会や家庭訪問も行った。

## 3. 結果と考察

文献レビューとインタビュー調査を通して、主に三つのことを明らかにした。

まず、社会階層にかかわらず、1980年代から「子ども中心主義」の育児パターンが主流になった点である。インタビュー調査を通して、専業主婦は子どものために仕事を辞めて母親役割の遂行により自己価値を確認していることが分かった。次に、「良き母＝価値あり」、または「キャリアウーマン＝価値あり」に対する考えは、それぞれ生きる時代（計画経済時期、市場経済時期）の性別規範により大いに影響を及ぼしていることが確認できた。さらに、育児援助の多寡は専業主婦の役割遂行に影響する主な要因ではなく、「良き母＝価値あり」と「キャリアウーマン＝価値あり」という規範の間に彷徨うことで、葛藤が生じてしまうことを明らかにした。

## 参考文献

- 景军主編、2017、『*喂養中国小皇帝：食物、児童和社会変遷*』、銭霖亮・李勝ほか訳、華東師範大学  
沈奕斐、2013、『*个体家庭 iFamily——中国城市現代化進程中的个体、家庭与国家*』、上海三聯書店  
呉小英、2014、『*主婦化的興衰——来自个体化視角的阐释*』、南京社会科学、第2号、62-68  
左際平、2005、『*20世紀50年代的婦女解放和男女義務平等——中国城市夫妻的經歷与感受*』、社会、第1号、182-209  
落合恵美子編、2013、『*親密圏と公共圏の再編成 アジアの近代からの問い*』、京都大学学術出版会  
坂部晶子編著、2021、『*中国の家族とジェンダー*』、明石書店  
宮坂靖子編著、2022、『*ケアと家族愛を問う*』、青弓社

キーワード：良き母の基準、科学的な育児、子ども中心主義